

りかへばや物語」にある女性の同性愛的関係 b_1 に対する関係は「奴の小まん」では見られない。又、「とりかへばや物語」でbの關係に拠つて姫君(女)Bと式部卿の宮の御子(男)Cとの密通懷妊事件の起る趣向は、假令「奴の小まん」にb'の關係があるにせよ、小まん(女)B'と果田(男)C'の間にはさういふ事件は起つてゐないのであるから、両物語に稍々相違点もあるわけである(因みに、「とりかへばや物語」の b_1 の關係に於ても女一の宮Gと若君Aとの間に密通懷妊事件が見られる)。

最後に、両物語中には変装男女に關係なき愛情描写のあつても、その共通点の一つであると謂へないこともない。しかしながら、その描写の分量の多少とか内容の深淺に至つては兩者の間に自ら差異があつて、「奴の小まん」に於て唐衣が宗景の側室として仕へる一方、家来の入江安濃次郎と恋愛關係を生じ(前編「一、楼に靈狐和琴を聞く」の条、六九六頁)、又、安濃次郎が遂に唐衣を自分の正妻としながら横雲を恋慕するといふ趣向がある(前編「二、雨夜に計て私夫を斬る」の条、七〇四頁)が、これらの、物語發展に占める地位は、「とりかへばや物語」の式部卿の宮の御子が四の君に懸想する趣向(四七七頁)の、物語の展開に重要な役割を果すのと比較すれば、頗る軽く描写されてゐるに過ぎないのである。

四

江戸時代の文化文政期は武士階級が腐敗墮落してその町人化・女性化は頂点に達し、享楽淫蕩の風潮は大名・幕府にも浸潤したが、その時に當つて發刊された(文化四年——西紀一八〇七年——)のが「奴の小まん」である。恰も「とりかへばや物語」が王朝貴族の衰微頹廢した中に現れた如く、「奴の小まん」も亦かかる時代の影響を幾分でも蒙つたと謂へないこともないだらうが、後に「源氏物語」を翻案して「修紫田舎源氏」を書き、その他「心中天網島」に拠つた「桔梗辻千種之衫」、「心中宵庚申」を翻案した「新うつほ物語」、「国姓爺合戦」を原拠とした「唐人髻今国姓爺」など古典・古浄瑠璃及び狂言の翻案又は綯交ぜの短篇物を著作することの多かつた種彦が、「新とりかへばや物語」と銘うつてここに「奴の小まん」を發刊したことを考へると、彼がよく当時の淫蕩的世相を洞察して、その共通した時代を遙か王朝末期に求め、「とりかへばや物語」に描かれた頹廢期の産物とも謂ふべき変装を一趣向として、作品に取り入れざるを得なかつたのも無理はあるまい。従つて、「奴の小まん」が「雨月物語」や「梅若丸一代記」等の著しい影響を蒙つてゐる他、「秋の夜の長物語」と關係交渉のあることは、既に後藤丹治先生も指摘してをられる(「中世国文学研究」八六頁)が、以上の如く、「とりかへばや物語」も亦尠からず影響を与へた一先行文学作品と謂ふことが出来ると思ふのである。(昭和二三・八・八稿、昭和二九・五・九補訂)

近世説美少年録の一考察

— 作風と原拠について —

山 川 一 安

曲亭馬琴の読本に近世説美少年録といふのがある。この作品は文政十一年に第一輯を刊行し、天保五年第四輯迄出して一時筆を止めたが、その後弘化二年、新局玉石童子訓といふ標題で稿を継いだ、しかし弘化四年、第六十回に至つて中絶してしまつた。

この作品は、あまり傑作であるとはいへないが、興味ある問題を含んでゐるのである。それは何かといふに、作風の問題である、従来この作品に關してよくいはれる事は、前半の作風と後半のそれとの間に著しい差異があり、殊に前半の趣向や叙述の有様などは、馬琴の読本としては全く異例に属する、といふ事である、すなはち前半の主人公は不良少年ともいふべき人物であり、又そのいくつかの場面は極めて淫蕩な描写が為されてゐる事などは、他の馬琴の

作品に見る徹底した道德思想を知る読者から見れば奇異の感を抱かずには居られないのである。

しかもこれが後半に入るとその作風は一変して勸善懲惡的なものになつてゐる。なほ私が不審に感ずるもう一つの事は、第五十回の少し前あたりから第六十回の中絶した箇所迄は、あたかも独立した別箇の物語の如き感がある事である。前半の主人公朱之介は退場して代りに二人の美少年が登場する上に、義士たちつどつて不仁の領主を討ち、さうして一応の大団円を見てゐるのであつて、何としても前半の筋書に關係なく別の物語を持来つてつないだ様な感がある事を否めないのである。

この様ないくつかの疑問のうち、前半の作風については麻生磯次博士の研究に依つて、中篇小说「櫛杭間評全伝」を原拠としたためである事が明らかにされて居り、私がこ

こで論ずるのは、後半作風が急変した事と、それに附随して別箇の物語をつないだ感のある事である。後半に至つて作風が急変した事については水谷不倒氏等の、名譽回復の意図があつたのであらうといふ説があるが、それ以外の理由もあるのではなからうか、と私は考へたわけである。さうして、その理由とは、原拠の交替といふ事ではないだらうかといふ考へを抱くに至つた、事実後半を検討した結果、第五十回あたりから、第六十回迄の大半を占める部分に、未だ何人も指摘しなかつた水滸伝の投影のあとが存する事に氣附いたのである。従つて、もちろん名譽回復の意図も大いにあつたのであらうが、原拠の交替といふ事も、作風の変化といふ事実の一原因ではなかつたかと考へるのである。さうして更に、全く独立した別箇の物語を持ち来つてつないだ感があるといふ事実も又、これによつて説明出来るのではないかと思はれる。しかし私がこのやうに主張したとて、実証が伴はなければ所詮空論に過ぎない、そこで逐次その事実を提示して行く事にするが、その前に先人の説について一言して置かうと思ふ。

先にも少し触れた如く、この書に関しては麻生磯次博士の「近世説美少年録と構杵間評全伝」（江戸文学と支那文学前編第三章第二節の七）といふ詳細を極めた研究がある、これに依ると、発端はおるか大体の筋骨構想等ほとんど前

とにかくさうなつてゐるのである。以下その水滸伝の影響について論述して行き度いと考へる。

美少年録と水滸伝との關係で、麻生博士によつて既に論じられてゐるのは、次の三点である。

第一に朱之介が如來禪師を訪れる段（第二十回）は、水滸伝第一回洪信が山中に一童子に面会する段に拠つて居る。

第二に佐々木高頼が家中の少年達に武芸を戦はせる段（第四十一回及び第四十二回）は水滸伝の青面獸揚志が北京で武芸を争ふ条からの影響である。

第三に譬の老人が太平記を暗誦して物を乞ふ条（第五十回）は、水滸伝の蒯永が鎗棒の術を使つて葉を売る条から脱化したものである。

この三点であるが、これ以外にもまだ多くの影響を水滸伝から受けてゐるのである。

二

水滸伝の趣向の再現として私が第一に指摘するのは、第五十四回「渾不似を弁じて防守宿を移す。小雪太名を竊て巧に悪を資く」より第五十五回「鎗箭の短刀暗に樵二郎を陥る。雨箇の健宗血を対決場に濺ぐ」に及ぶ迄である。すなはち韓錦樵二郎なるものを鎗野郡司範的が謀つて罪に陥

半の全部を通じて、中国小説構杵間評全伝に拠つて居り、又部分的にはやはり中国小説柏案驚奇卷十八「丹客半黍九還富翁千金一笑」からも素材を求めた形跡が明らかである。と論ぜられてゐる。さうして麻生博士は、六十回のうち三十九回迄は原本（構杵間評全伝）の筋をたくみにふまへてゐるが、それ以後は殆んど原本から離れてゐる。中途から眼の自由を奪はれ、たよるべきものを失つたためであらう、といはれてゐる。これは事実であり、確に眼の自由を奪はれて構杵間評全伝を原拠とする事は出来なくなつた、従つて若し頼るとすれば、馬琴が多年親しんで殆んど暗記してゐる程になつてゐた書物である事は間違ひなからう、その書物が水滸伝であつたわけである。もちろん麻生博士の論ぜられた如く、途中で視力を失つたので、眼で見る書物を原拠とする訳にいかなくなり、脳裏に暗記してゐた水滸伝に移つて行つたと見るのが正当な解釈であらう、細かく検討すると氣の附く事は、それ迄にも部分的に見えてゐた水滸伝の影響が後半極めて多くなつてゐる事である。

しかも特筆すべきは、趣向は大いに取入れて用ひてゐるが、その手法は極めてたくみであつて、語句や文章はあまり類似のものを用ひてゐないといふ事である。それは眼が見えなかつたためか、又は翻案の技術が上手になつてゐたのか、或はその双方共であつたのか判然としないけれども、検討を加へようと思ふ。

先づ美少年録（第三十一回以後は新局玉石童子訓と題が變つてゐる）の方では、鎗野郡司範的は韓錦樵二郎に、女の事から遺恨を持ち、これを除かうとして小雪太なる者に相談すると、小雪太はたくみに悪計を案じて範的に授ける。範的は大いに喜んでその謀を実行させる、一方樵二郎の宅へ何者か尋ねて来たものがあり、錦のふくろに入れた短刀を置いて行く、後に外出から歸つて来た樵二郎は一見して殿の重宝であるらしいと知つて驚き、届けに行く、問注庁に至るといきなりわなにかけて倒され、数十人の捕手に捕へられる、その時範的が現れて、その宝剣を盗んだであらうといふ、樵二郎は事実を述べて陳弁につとめるがもとより始めから企らんだ事であるから聴かれる筈もなく、遂に獄につながれるといふのである。

ところが水滸伝第七回には次の様な趣向が見えてゐる、すなはち高俣の養子高衛内は林沖の妻に横恋慕して失敗し、

遂に病気になる、そこで高俵は邪魔になる林冲を除かうとして、陸謙、富安の二名に相談すると、陸謙は策を高俵に授ける、高俵は喜んでその策の実行を命ずる、一方林冲はそれよりすこし後途上で剣を売る男に会ふ、その剣を手につけて見るとまことに希代の名剣であるので買求める、それこそ高俵の奸策なのであつたが林冲はそれとも知らず、高太尉（高俵）の宅にも宝剣があると聞いてゐるが、それと比べて見たいものだと思つてゐると、翌日高俵の使者と称するものが訪れ、高俵が刀くらべをしようといつて居ると伝へて来たので、林冲はその言を信じて案内されるままに一堂に入るとそこは白虎節堂（軍機を議する場所）で無断で立入ると罪に問はれる）であつたので林冲は驚いて出ようとする時、高俵が現れて、白虎堂へ不法に立入つた事を責め、又手に刀を持つてゐるのは私（高俵）を殺さうと企らんでゐるのだらうといふ、林冲は驚いて事実を説明して陳弁するが、もとより始めから企らんだ事であるから聴入れられる筈もなく、二十数人の捕手に捕へられて獄へ下されるのである。

これは極めてたくみな翻案である。用語の類似も少い。全く彼馬琴のものとなつてしまつてゐる。つまり趣向だけを上手に使つて、馬琴流に作り変へてゐるのである。試みにここに両者の共通点を挙げてみると、第一には両者とも

権力者が自分の為に邪魔になる目下のものを葬るために悪計をめぐらし、第二にはその原因はいづれも女の事が關聯して居り、第三にはいづれも部下に策を授けられて行ふのであり、第四にはその陥れる手段にいづれも宝剣を用ひてゐるのである。

いふ迄もなく範的は高俵に当る役割を持ち樞二郎は林冲である。又陸謙の役割は小雪花が果してゐる。たゞ少し違ふのは、水滸伝では高俵の息子が林冲の妻に懸想した趣向を美少年録では範的自身が韓錦樞二郎のかくまつた美女掙手に懸想した事に作り変へられて居り、又その結果は樞二郎は盜賊の汚名を着せられ、林冲は法規違反の罪に問はれる。このやうに部分的に作り変へも目立つけれども全体的に馬琴が襲用した痕跡は歴然たるものがある。

さて水滸伝ではこのあと林冲は配流されることになつてゐる。ところが美少年録の方ではこのあとを水滸伝第四十九回「解珍宝雙越獄。孫立孫新大却牢」の趣向でつないでゐるのである。すなはち美少年録第五十七回では、韓錦樞二郎の妹押絵、大江杜四郎成勝、峯張柴六郎通能等は獄を破つて樞二郎を救ひ出すのである。その時の有様は、問注序を大いに開がし、獄に乱入して押絵はその大力で獄を破り、捕手共と戦ひ乍ら樞二郎を救けて走り、さうして根拠地と定めた阿魁寺に入るとある。ところが水滸伝にもこの

やうな箇所がある。第四十九回には次の様な趣向が見えて

ある、すなはち獄に捕へられてゐる両頭蛇解珍、雙尾蝎解宝を救出するため、病尉遲孫立、小尉遲孫新は母大虫顧大嫂と共に牢屋を破るのである、彼等はたくみに牢内に忍び込み、顧大嫂は獄卒を欺いて中に入り、解珍解宝を救ひ出してから大乱闘が始まり、彼等は追手と戦ひ乍ら走つて根拠地である梁山泊に入るといふのである。この箇所も又仲々巧に翻案されて居り、語句文章の類似もわづかより見当らない、原形もほとんど止めない迄に脱化させてゐるのである。ここでは孫立孫新の二名は、成勝と通能の二名に置きかへられてゐる。又豪勇の女傑顧大嫂は押絵なる大力無双の女性に置きかへてある。更に又梁山泊の再現として根拠地阿魁寺が登場する。たゞ捕はれてゐる解珍解宝の二人はここでは樞二郎一人に置きかへられてゐる。

ここで両者の趣向の共通するところを挙げて見ると、第一に両者共に不当に捕はれたものために獄を破ること、第二にその主謀者は三人であつて、その一人は大力の女性であること、第三にその中で最も活躍するのは、いづれも女性であること、第四に破獄が成功した後いづれも追手と戦ひ乍ら根拠地へ入ること、以上の四点である。部分的には多少の相違点を見出すのであるが、大体の趣向には大差を認めず、この箇所にも又水滸伝の投影がある事は明らかで

ある。

それから、少し順序は前後するが、獄を破る少し前に、樞二郎の罪は人に陥れられたものであるといふ事を証明する生証人ともいふべき盜人の十六郎を生捕つた押絵等が、問注序へ出向き、宝剣の企みを暴露して、樞二郎を引渡して呉れと談判すると、応待に出た鬼薊奇三屈樂なるものはその口上を耳にもかけず、眼をいからし「腰に刀を帯たるは逆心あるにぞあらむずらん」と難癖をつけるのであるが、これは先に述べたところの、林冲が捕へられる時、白虎堂で高俵が林冲に向つていふ「係手裏拿着刀。莫非来刺殺下官」なる言に共通するものがある、しかも又その態度も甚だ相近いものが見受けられるのである。しかし馬琴がここでこの水滸伝の一句を用ひた事は、成功しつつあつたこのあたりの水滸伝の趣向の摂取を拙くした観がある。筋書から見てこの言葉は少しも必要とは思はれない上に、今迄ほとんど原型を止めない程たくみに翻案して来たのに、この一句で水滸伝に拠つてゐる事を自白してしまつたやうなものである、実のところ私もこの一言を見出してから始めてこの附近の水滸伝の影響に氣附いたのである。

このやうにして戦端が開かれる。韓錦樞二郎を救ひ出した大江杜四郎成勝、峯張柴六郎通能、押絵等は、鎬野のはか郡司健宗と戦ふのである。大江成勝等の阿魁寺を根拠

地とする義兵は初め戦ひに勝つが、健宗方に枉津天女なる妖怪が現れて妖術を用ひ、成勝等の義兵は散々の目に遭はされるのである。この条にも水滸伝の反映が認められる、それは水滸伝第五十二回「李達打死殿天錫。柴進矢陷高唐州」の一場面、知府高廉が妖術を用ひて梁山泊の兵を悩ます条から出たのである。この美少年録第五十九回には次の如く書かれてゐる。

那時遅し這時速し。件の腰輿の内よりして怪しき少女閃き出て。腰輿の上に立顯れ。長なす雲鬚振乱し。手に宝剑を抜鬚して敵に向ひて揮晃かす。刃の光は電光石火。人の目を射る程しもあらず。巽の方より一陣の怪風咄と下し来て。沙を飛し樹を仆し屋を損ひ巖を転す。狂暴名状すべからず(中略)然しも勇し一千の。義兵は面を向るによしなく。人馬齊一吹倒されて。沙礫に打れ樹幹に折れ。或は水田に滾落。或は己が刃に劈れて。死活を知らざる者多かれども。起つ砂煙に天さへ曇りて朦々朧々となる隨に。親撃るれども子は是を知らず。主危ふけれども從者の救ふなし。

この一節の原拠となつた水滸伝第五十二回の記載は次の如くである。

高廉見連折二將。便去背上掣出那口太阿宝剑來。口中念念有詞。喝声道。疾。只見高廉隊中捲起一道黑氣。那道氣散至半空裏。飛砂走石。撼地搖天。刮起怪風。淫掃過對陣來。(中略)林冲等軍馬。星落雲散。七斷八繞。呼兒喚弟。覓子尋爺。五千軍兵折了一千余人。

ちる、その時枉津の持つて居た剣で、領主健宗の首も落ちてしまつた。といふのであるが、水滸伝の方では敗勢に驚いた高廉は、妖術を用ひて逃れようとする、その時梁山泊勢の中から入雲龍公孫勝は騎馬でかけつけてこれを見るや、宝剑を把つて一喝すると高廉の術が解け、高廉が転落するところを、挿翅虎雷横が斬つて捨てる。こうして妖術使であり、領主である高廉は死す、といふ事になつてゐる。この箇所には相當な苦心を払つたのであらう。語句や文章にはあまり類似のものがないのみならず、趣向も少し作り変へてある、第一に水滸伝の公孫勝が用ひる宝剑の靈力は美少年録では仙丹の靈効に置きかへ、第二には水滸伝では高廉が領主と妖術使との二者を兼ねてゐるのに対し、美少年録では領主は健宗、妖術使は枉津天女と二人に作り変へてゐるのである。しかし第二の点はこの筋書上少し無理を生じた、つまり水滸伝では高廉一人を死なせれば領主も妖術使ひもなくなるが、美少年録では二人同時に片附けるといふ必要があつたのである。しかしかきに伝奇小説とはいへ、この場面で枉津天女と健宗の二人を一時に片附けた趣向には少し無理があり、話が旨すぎる感じがする。恐らくこの条を記す時馬琴の脳裏には水滸伝の高廉最期の場面が鮮明に浮び上つてゐたのであらうと考へられるのである。ここで馬琴が水滸伝から借用した要素は、第一に妖術使と

右の如く両者を比較する時、その流用の形跡は明白なものがある。水滸伝の文脈をたどつて美少年録のこの一節を作り上げたものと思はれるのである。勿論、枉津天女は高廉の再来であり、成勝通能等の義兵は「林冲等軍馬」である。前と同様、阿甦寺は梁山泊に當り、枉津天女の用ひる術は高廉のそれと全く同じものである。更にこの術はいづれも領主方の敗勢を盛り返すために用ひられたのであつて、しかもその時にはいづれも宝剑を道具に使つてゐる。このやうに水滸伝との関係は極めて密接なものがあつて、最早多言を要しないと思はれる。

その次に見出される水滸伝の投影は、第六十回「魚丸妖魔を対治して絶たる家を興す。晴賢命を免れて夜三池邸に走る」の中の一場面、枉津天女と健宗の最期である。拠り所としたのは水滸伝第五十四回「入雲龍闖法破高廉。黒旋風探穴救柴進」の中の、妖術を用ひる知府高廉が梁山泊の公孫勝のために術を破られて最期を遂げる場面である。この箇所は少し複雑な反映をしてゐる、美少年録の方の梗概は、阿甦寺の軍兵と対陣した健宗勢の中から枉津天女が現れ、敗勢になつた健宗勢を盛り返すべく又も妖術を用ひようとする。その時阿甦寺の軍中であつて、これをうかがつていた和田小十郎正義は騎馬でかけつけて、仙丹の入つた硝子壺を投げる、これが命中して術が解け、枉津は倒れ落

領主の最期となること、第二に妖術を用ひようとするのを封じること、第三にこれによつて戦が終り、主人公側の軍が勝利を得ること、である。しかもこの箇所には、作り変へた所はあるにしても、文脈はその通りたどつたやうに見受けられるのである。

なほこの外にも、この阿甦寺の軍勢と健宗軍との戦ひには、水滸伝の影響が断片的に見出されるのである。それは高廉の術を記した水滸伝第五十二回及び第五十四回の外に、第四十八回王英を捉へる女傑一丈青顧三娘の武者振りが押絵の活躍に取入れられ、又礫の名人没羽箭張清の術が和田小十郎正義の精妙の礫に取入れられてゐるのであり、更にこの戦の全体の感じは水滸伝的活劇である。

さて水滸伝の影響のやや大掛りなものは以上の如きものであるが、他にも少し部分的な影響が認められる箇所が存在するので、少し述べて見たいと思ふ。それは第二十回「草祿の役君臣乱離す。鷹捉山に晴賢鷹を逐ふ」の条中、朱之介が主君扇谷朝興に命ぜられて沙金五百両及び白布二百反を運送することになるが、その時運送の方法は如何と問はれて答へる場面である。これは水滸伝第十六回「楊志押送金銀担。具用智取生辰綱」に於ける楊志が梁中書に答へる態度を模したものである。先づ美少年録を見ると次のやうになつてゐる。

今この件の金と布とを吉野まで運送せんに道中幾十数の従者を要するや。搦て汝が望に任せん宣致定むべし。と亦他事もなく急れて朱之介は脱るゝ路なく雲時頭を傾けて。逆旅に多人数なるものは遣て人に怪られて障りになる事候べし。有徳ば布とおん金は韓櫃二前ばかりに蔵めて是を昇もの七八名。別に室領一名を添らねば、足るべうもや候はん。扱某は山伏の峯入するごとく打扮て大約這八九箇の従者を得て路を急がば誰か怪みて禁むべき。輒く那地へ到らんこと何の疑ひか候べき。この義は御心やすかるべし。と憚る所もなくまうししかば朝興のぬし太く感じて。連微妙く計りけり。

次に水滸伝第十六回を見ると。

楊志又稟道。若依小人一件。事便敢送去。梁中書道。我既委任你身上。如何不依你説。楊志道。若依小人説時。並不要車子。把礼物都製做十余条担子。只做客人的打扮行貨。也点十箇壯健的願禁軍。却装做脚夫挑着。只消一箇人和小人去。却打扮做客人。悄悄連夜送上東京交付。無地時方好。梁中書道。你甚説的是。

といふ風に記されてゐる。楊志に当る人物はもちろん朱之介であり、梁中書に相当するのは扇谷朝興である。意見を求められて述べる態度も極めて相近い上に、その意見を聴いて受入れる有様も殆んど同じである。又その押送の方法を見るに、美少年録では多人数は怪しまれるから人数は少く、服装は山伏に扮しようといひ、水滸伝ではやはり人数の多いのはいけないし、車も不要である。服装は客人の

様に扮してひそかに送り届けようといふのである。かくの如く見れば水滸伝第十六回と美少年録のこの箇所との関係は判然とするのである。

三

以上種々述べた如く、潜在する水滸伝の投影はかなり大きなものがあり、第五十四回、第五十五回、第五十七回、第五十九回、第六十回にわたる種々の点に影響を及ぼしてゐるのである。しかも従来指摘されていたのは、第二十回、第四十一回、第四十二回、及び第五十回であるから、美少年録の後半は非常に水滸伝の影響が多いことになる。これに反して櫛枕間評全伝に拠つてゐた前半は第二十回に部分的影響が認められるのみである。この事實は、早くから説かれてゐた前半後半の作風急変の理由の一つに数へられるべきものではないかと考へるのである。更に後半の阿甍寺に籠る義兵の活躍の物語がこの作品の本筋と離れた独立のものであるかの如き感じがする理由も、又この事實に存するのではないかと思はれる。とにかく、櫛枕間評全伝に拠つた前半に情事が多かつたのは原拠に引ずられたのであると同じやうに、後半一変して活劇が多く武張つた作風になつたのも水滸伝に負ふ所が多であつたからと考へても差支へはなからうと思ふのである。

享保五年「心中天の網島」上演に關する諸事實

今日も文楽や歌舞伎で度々上演される「心中天の網島」は享保五年庚子（一七二〇）十二月六日、大阪道頓堀竹本座でその幕を開いた。時に作者近松門左衛門六十八才と称されている。「紙治」「河庄」として知られる本曲は、その後「双扇長柄松」、「中元噺掛鯛」、「置土産今織上布」と諸種の改作を持ち、安永七年に至つて半二の「心中紙屋治兵衛」が北の新地西の芝居に掛つた。その後本作は繰返し各小屋で上演され、途中で増補版「時雨の炬燵」の出現もあつて、近世邦楽年表の記すところでも合計三十六回の多き上つてゐる。此事實は本作が非凡な価値のあるものであり、特に原曲の着想の妙、構成の巧み、文章辭句の流麗を如実に語るものであり、まして今日の上演が殆んど巢林子原典を重視している事を考へる時、享保五年の最初の上演の際の事情を充分明白にして置く事の必要性が痛感される。本稿はこの「天の網島」の周辺にある諸事實を調査したのだが、勿論未だ他に多くの記事が保存されている事と思われるので欠けた点は今後充実する様努力し度い。

享保五年「心中天の網島」上演に關する諸事實

浅野達三

一 最初は各書に記されている上演の事實である。

外題年鑑の当流竹本筑後掾の部には次の如く記されている。

小春 治兵衛 心中天網島 同年十二月六日

同 上

文大夫又出座

此処で同年とは享保五年庚子のことであり、同上とは作者近松門左衛門のことである。この外題年鑑は宝曆版・明和版・安永版・寛政版と四種あるが、そのうち寛政版のみにこの同上の文字があつて他には見当らない。

又、古今外題年代記の同様箇所には

小は。 治兵衛 心中天網島

同年十二月六日 文大夫又出座

とあり、更に声曲類纂卷之二竹本座浄瑠璃外題の部分には

外題年鑑を増補してこゝに記す。外題の下に月を記すは興行の